

# 自作自用から見た暮らしを豊かにするモノづくり

—秋岡芳夫が提唱した「愛用者」と「詠え」の実践—

森と木のクリエイター科 木工専攻 輪竹 剛

## 1. アカデミーでの学び—研究の背景と目的—

あらゆるモノが大量生産、大量消費され、それが経済循環の前提となっている現代社会に生きながら、私はモノづくりの現場に興味を持った。自ら作りたいモノを想い、作り、そして使ってみる過程を経験することによって、その現場をより理解してみたい、と考えて私はアカデミー木工専攻の学生となった。

アカデミーでは、自ら使うモノの製作（「自作自用」）に力を入れて取り組んできた。自ら考えて、手を動かして作って、使ってみるという過程を経験して、モノづくりの仕事の難しさと面白さを感じながらも、生活の道具ができるまでの過程、工夫、デザインと製作過程を知り、考えるきっかけとなった。自ら作って使うモノづくりの体験や経験が、暮らしの中に「面白い、楽しい」という新たな感覚→暮らしの豊かさに気付かせてくれたのである。この私の体験や経験を考えたときに、かつて秋岡芳夫氏（1920-1997）が残した大量消費社会へのメッセージと共通するものがあるのでは？という気づきをもったことが、課題研究の背景である。

本研究は、秋岡氏が提唱したモノと人の関係観と、私自身の体験や経験知を融合することで、暮らしを豊かにするモノづくりのあり方を明らかにし、他者に伝えるきっかけづくりができるか実証することを目的とする。

## 2. 課題研究の流れ

図1のフローチャートにより、調査研究を実施した。

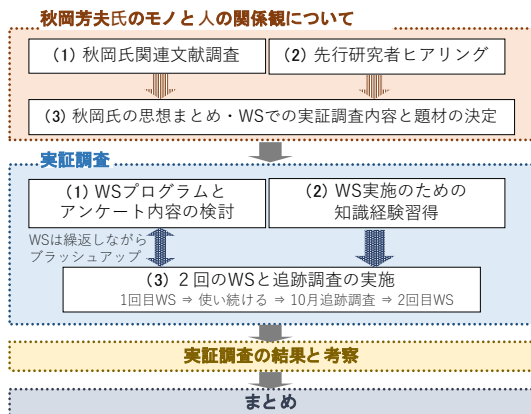


図1 課題研究実施の流れ

## 3. 秋岡氏のモノと人の関係観を理解する

秋岡芳夫氏は、日本の高度成長期に活躍した工業デザイナーである。50歳頃（1970年代）から、デザイナーやクラフトマンなどが集い語り合う場づくりを始め（「グループモノ・モノ」）、仲間とともにモノと人

の関係を人間中心にリ・デザインしていく活動を行う。その取り組みは終生続いた。

近年は秋岡氏の取り組みが再評価されており、秋岡氏著作の復刻や秋岡氏がデザインしたモノづくりのワークショップ実践などが行われている。

文献調査と先行研究者へのヒアリングにより、秋岡氏のモノづくり精神の理解を深めることとした。

秋岡氏のモノと人の関係観を表す2つのキーワード（「詠え」と「愛用者」）を体得することで、身近ないろいろなモノに対する認識が変わり、失いかけていた暮らしの豊かさを感じるきっかけになると考えたのである。「詠え」とは、大量生産や規格もの商品の中で使い手と作り手が分断されるのではなく、使い手と作り手が一体となって丁寧にモノづくりをしていくことであり。「愛用者」とは、図2に示す「愛用者」のサイクルが循環することが、モノづくりの原動力であり、秋岡氏が理想としたモノづくりと人とのあり方である。

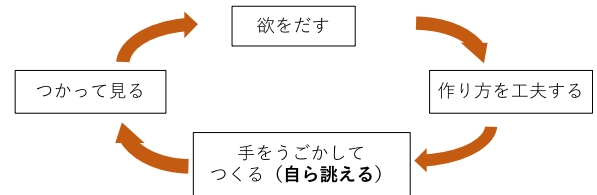


図2 「愛用者」のサイクル

一般の人びとにモノづくり実践から暮らしの豊かさを感じてもらおう仕掛けの場として、ワークショップ（WS）という手法を考えた。そのためには、自らのために自らの手で繰り返し詠えて、使って検証することを行う場、つまり「愛用者」のサイクルが生まれるような詠えの場を提供することで可能となるのではという仮説を立て、WSプログラムを開発し、アンケートと併せて実証調査することとした。

## 4. 実証調査の方法としてのWSの特徴

### 【箸を題材にする理由】

WSの題材とした箸は、日本人にとって手と口に触れる機会が最も多い、身近な食の道具である。また、製作においても長さ、太さ、重さ、形などのデザインを自分の身体に合わせてつくことに適した題材であると考えた。

### 【WSプログラム開発における条件設定】

- ◇ 自分の感覚に合った箸のデザインを考える時間を設ける。（全体3時間のうち、1時間）
- ◇ 自ら詠えた箸を使い続けてもらう（およそ2ヶ月）（箸の試用もWSプログラムに組み込む。）

- ◇ 追跡調査を行い、検証する。
- ◇ 繰り返して詠える機会として、2 回目の WS を設定。
- ◇ 少人数制（1 回当たり参加者 5 人目安）

## 5. 実証調査の結果と考察

### 5-0 WS 実施概要 表1のとおり。

フィールド	開催場所	1回目WS	2回目WS	参加人数
(a-1) 岐阜	百年公園レストハウス (岐阜県関市)	7/17 (水)	11/9 (日) (開催せず)	6人
(a-2) 岐阜	百年公園レストハウス (岐阜県関市)	7/19 (金)	11/9 (日) (開催せず)	5人
(b) 東京	昭和のくらし博物館 (東京都大田区)	9/21 (土)	11/23 (土)	6人
合計				17人

表1 2回のWS実施概要

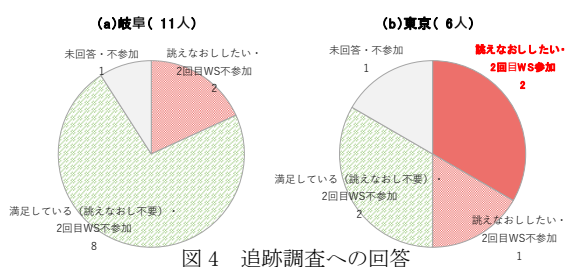
### 5-1 1回目WS

- 1 回目 WS 終了後の参加者の主な感想は以下のとおり
- 箸はシンプルな道具だが、最も人間の手に触れるものでもあり、奥深いデザインがある道具であることを知った。
  - いろんなサンプル箸を持ち比べて、自分にじっくりくる形が考えられて良かった。
  - こんな箸が欲しい、こうだったら良いなという気持ちがある以上にあることに気づき驚いた。



### 5-2 追跡調査

質問による追跡調査と 2 回目 WS の案内を 1 回目 WS 参加者 17 人へメールまたは郵送で送付。詠えなおしの意向と、2 回目 WS 参加意向の回答は図4のとおり。



結果、岐阜では2回目WS参加希望者はいなかったため開催せず、東京で2人の希望者を対象に2回目WSを開催することとなった。

2 回目 WS に不参加と回答した方の内、3 人から以下の内容の回答が寄せられた。

- 自ら手直ししながら使い続けている。
- 箸とセットで使う箸箱や箸置きを作りたくなった。
- 毎月写真に記録して箸の変化を観察している。

### 5-3 2回目WS

- 2 回目 WS 参加者の箸は、
- ✓ 使用中に箸が折れてしまった（細くしすぎた）。

- ✓ 箸の面取り部分の指当たりに違和感があった。とのことであった。

2 回目 WS 実施後、以下の感想が寄せられた。

- 「愛用者」のサイクルをととても良く理解でき、実感できた。
- さらに良いモノを作るための技術の無さにもどかしさを感じた。
- 完成品のメンテナンスに関する技術的相談を受けられる場が欲しくなった。

### 5-4 簡易版WSの開発と開催

9/21 の WS 実施後、会場運営者から短時間で気軽に参加できるWSの提案を受けた。そこで、表2のとおり1回のみ簡易版WSを開発し実施した。

#### 【簡易版WSプログラム開発における条件設定】

- ◇ 製作は1回のみ。
- ◇ 1~2時間程度の短い時間。
- ◇ 自分の触覚に合った箸のデザインを考えるプロセスと時間は残す。
- ◇ 完成品のクオリティを担保するため、加工しやすいホオノキを使用。長さは短めの弁当用箸材に限定。

開催フィールド	WS開催日	参加人数
愛知：豊橋駅前広場「いちにち骨董マルシェ」	11/3 (日)	5人
岐阜：アカデミー翔楓祭	11/9 (土)	5人
岐阜：アカデミー翔楓祭	11/10 (日)	5人
東京：昭和のくらし博物館	11/23 (土)	2人
愛知：豊橋駅前広場「いちにち骨董マルシェ」	12/1 (日)	2人
合計		19人

表2 簡易版WS実施概要

### 5-5 一連のWSを終えての結果考察

(1) 2 回の WS でも、1 回のみ簡易版 WS でも、「愛用者」のサイクルや「詠え」というキーワードで参加した WS 体験から、箸という身近なモノに対する向き合い方が変わるきっかけになっている。

(2) 2 回目の WS に参加した方の感想から、より良いモノづくりをしたいという、さらに高みを目指す意欲が現れる一方で、短い製作経験では獲得しきれない技術力とのジレンマが起きていることがわかる。

## 6. まとめ

WS 参加を通して「作る」事に意識が向くことで、身近なモノに対する向き合い方が変わり、暮らしの豊かさを感じるきっかけ作りの場作りができたことが、今回の私の取り組みによる成果と考える。学外の WS 運営者からは、内容への評価と継続開催への要望を頂いている。一方で、更なる WS 改善のポイントとして、より良いモノづくりをサポートする講師としての技術を備えること、より長くモノを使い続けるためのメンテナンス相談などができる場の必要性も感じた。

暮らしを豊かにするモノづくりについて明らかにすることに加え、WS という場で伝えることの手応えを感じた。今後も更に継続していくこととしたい。